洋１６－９９　（ショートコメント）

「インデペンデンス・デイ　リサージェンス」　✵✵✵

２０１６（平成２８）年7月9日鑑賞＜ＴＯＨＯシネマズ西宮ＯＳ＞

監督：ローランド・エメリッヒ
ジェイク・モリソン（地球防衛軍の若き戦闘機パイロット、レガシー飛行隊のエース的存在）／リアム・ヘムズワース
デイビッド・レヴィンソン（ＭＩＴ出身の天才エンジニア、ＥＳＤ（地球宇宙防衛）部長）／ジェフ・ゴールドブラム
トーマス・ホイットモア（元アメリカ合衆国大統領）／ビル・プルマン
パトリシア・ホイットモア（ホイットモア元大統領の愛娘、ジェイクの恋人）／マイカ・モンロー
ディラン・ヒラー（殉職したスティーブン・ヒラー大佐の息子、レガシー飛行隊々長）／ジェシー・アッシャー
チャーリー・ミラー（ＥＳＤ（地球宇宙防衛）のパイロット、ジェイクの相棒）／トラヴィス・トープ
アダムズ将軍（宇宙防衛本部の指揮官）／ウィリアム・フィクナー
キャサリン・マルソー博士（デイビッドの旧友である女性心理学者）／シャーロット・ゲンズブール
ジュリアス・レヴィンソン（デイビッドの父親）／ジャド・ハーシュ
ブラキッシュ・オーキン博士（エリア５１の秘密基地でＵＦＯと地球外生物を研究していた変人科学者）／ブレント・スパイナー
ランフォード大統領（現職のアメリカ合衆国初の女性大統領）／セラ・ワード
レイン・ラオ（インターナショナル・レガシー大隊の美しき中国人女性パイロット）／アンジェラベイビー
ジャスミン・ヒラー（殉職したスティーブン・ヒラー大佐の未亡人、ディランの母親）／ヴィヴィカ・Ａ・フォックス
ジャン司令官／チン・ハン
２０１６年・アメリカ映画・１２０分
配給／２０世紀フォックス映画

◆私は『デイ・アフター・トゥモロー』（０４年）（『シネマルーム４』８４頁参照）を観て、すぐにローランド・エメリッヒ監督のファンになった。それに続く、『紀元前１万年』（０８年）（『シネマルーム１９』１６９頁参照）も、『２０１２』（０９年）（『シネマルーム２４』未掲載）も面白かった。そんなローランド・エメリッヒ監督を一躍世界的に有名にしたのが、『インデペンデンス・デイ』（９６年）だから、それから２０年後の今「２０年前の激闘は序章にすぎなかった。この夏、人類は＜映画史上最大の決戦＞で、別次元のスペクタクルを体感する！」と言われると、そりゃ必見！そう思って、劇場に行ったが・・・。

◆「インデペンデンス（independence）」とは独立。イギリスのＥＵからの残留か離脱かを決める国民投票の結果はご承知の通りだが、その後、２０１４年９月の住民投票でイギリスからの独立が否定されたスコットランドで、ＥＵへの残留とイギリスからの独立問題が再燃しているのは皮肉な話。考えてみれば、アメリカはイギリスから独立を果たした国で、その独立記念日が１７７６年7月４日だ。しかして、前作の『インデペンデンス・デイ』では、地球上に襲来してきたエイリアンたちを撃退し、宇宙における独立を高らかに宣言したのがインデペンデンス・デイ＝１９９６年7月４日だった。
　エイリアンの襲来によって３０億人の尊い命を失った人類は、次の来るべき日に備えて、彼らが地球上に残した宇宙船のテクノロジーを取り入れ、堅固な地球防衛システムを築き上げた。しかし、かつての日本への「蒙古襲来」が１２７４年の「文永の役」の一度にとどまらず、１２８１年の「弘安の役」へと続いたように、地球は２０年後の２０１６年、再びエイリアンの侵攻に晒されることに。

◆２０年も経てば、アメリカ合衆国の大統領や地球防衛の第一線の軍事任務に就く若者たちが交代しているのは当然。また、科学技術は日進月歩だから、科学者たちの顔ぶれが代わっているのも当然だ。前作の『インデペンデンス・デイ』を鑑賞している人は、そんな比較対照をしながら、本作に登場する政治家たち、軍人（パイロット）たち、科学者たちの顔ぶれを確認するのも一興だろう。
　ちなみに、本作ではアメリカ合衆国の女性大統領、ランフォード大統領（セラ・ワード）が登場するが、これはアメリカに近々女性大統領が誕生することを予告するもの・・・？なお、インターナショナル・レガシー大隊のパイロットとして、大した役割を果たすわけでもない美しき中国人女性パイロットを登場させるのは、『ゼロ・グラビティ』（１３年）（『シネマルーム３２』１６頁参照）や『オデッセイ』（１５年）（『シネマルーム３７』３４頁参照）と同じように、ハリウッド映画が中国に媚びを売っていると言われても仕方ないのでは・・・。

◆韓国で大ヒットした、ポン・ジュノ監督の『グエムル　漢江の怪物』（０６年）における「怪物グエムル」のクリーチャー・デザインのコンセプトは、「水陸を自在に行き来する、魚類と爬虫類を兼ねたようなもの」だった。そして、スクリーン上に観たその姿は、ユニークで面白いものだった（『シネマルーム１１』２２０頁参照）。他方、２０１４年に大ヒットしたハリウッド版『ＧＯＤＺＩＬＬＡ』（１４年）（『シネマルーム３３』２５４頁参照）は、１９５４年の日本版『ゴジラ』（５４年）（『シネマルーム３３』２５８頁参照）を踏襲したものだったから、その姿は同じで、日本人には馴染みの深いものだった。
　それに対して、本作に見るエイリアンたちの姿は？それに共感を持てれば本作は楽しい映画になるのだが、それがイマイチだけに、本作はイマイチ・・・。さらに、女王蜂がすべてを支配している蜂の世界では、女王蜂が死ねばその配下の蜂たちもすべ死んでしまうそうだが、さて、本作に見る「女王蜂的エイリアン」の役割は？それにもあまり共感を持てないから、さらに本作はイマイチ・・・。